

同和地区児童・生徒の低学力要因の検討

— 家庭の生活実態と自尊心に着目して —

広島大学大学院 久保田 真 功

一 はじめに

一九八〇年代以降、同和地区児童・生徒の学力保障の視点から、学力調査が各地で行われた。これらの調査では教科テストとあわせて、生活実態調査を実施し、両者の関係について検討が試みられた。その結果、地区内外で学力格差が依然として存在していることが明らかとなった。

また、これらの調査により、生活実態と学力とが大きく関係していることが明らかとなった。たとえば森（一九八六）は、一九八五年大阪府下で実施された調査データをもとに、家庭生活に関わる諸要因（欠親状況、家族との会話の有無、勉強机や参考書の有無など）をスコア化したもの（スコアは生活条件が悪いほど高くなるようになっている）と教科テストとの関連を分析している。

その結果、スコアが高くなるほど、正答率分布が低い方に偏っていくこと、同じスコアのグループ同士を比較しても、地区の子どもたちで正答率が低い方に偏る傾向が見られることなどが明らかとなった。

さらに、一九八〇年代の後半からは、同和地区児童・生徒の低学力問題に対して自己概念 (self-concept) を取り入れた研究が盛んに行われている。このような試みの背後には、生活実態と学力との媒介要因として自己概念を設定することにより環境決定論に陥ることを防ぐという意図があったと考えられる。さらに、社会経済的要因とは異なり、自己概念は教育によって高められる可能性があるという点も、自己概念が調査枠組みに取り入れられたことと大きく関係しているだろう。

自己概念の構成要素のうち、とりわけ注目されているのは自尊心 (self-esteem) である。先行研究により、

「小学生では、自尊感情の高い者が占める割合は地区でやや低い、中学生では地区・地区外間でほとんど差が見られないこと」、「学力の高い者ほど自尊感情の高い者が多いこと」、「自尊感情と階層との間には弱い相関しか見られないこと、すなわち自尊感情が階層とはある程度独立したものであること」（池田一九九二、泉南市教育委員会一九九三、田畑一九九一など）などが明らかとなっている。

以上を踏まえ、本研究では、同和地区児童・生徒の低学力の要因を、家庭の生活実態と自尊感情という二つの側面から検討することを目的とする。

なお、本研究の独自性は、分析に使用する調査データにある。データは、かつての調査対象者（当時小学五年生）に追跡調査（当時中学三年生）を実施した結果得られたものである。このことの利点の一つは、学年の進行に伴う地区・地区外間の学力格差顕在化の問題を検証できることにある。先行研究により、学年が進むにつれて地区・地区外間の学力格差があらわれ、拡大していく傾向の視られることが確認されている（外川一九九八、米川一九九八など）。しかし、これらは一時点のみの横断的データをもとにしてしているため、学年の進行に伴う学力格差の顕在化を直接裏付けることにはならない。そこで、

小学五年時・中学三年時という二時点での同一児童・生徒の調査データをもとに、時間的変化による地区・地区外間の学力格差顕在化の有無を検討したい。

もう一つの利点は、時期的要素を考慮に入れた分析が可能となることにある。学力と関連が深いと考えられる学習環境を例にとってみよう。一時点のみの横断的データをもとにした分析の場合、学習環境の整備が学力の向上に寄与することを明らかにできても、「いつ整備するのが望ましいのか」ということまでを明らかにすることはできない。しかし、同和地区児童・生徒の低学力は、学習環境の整備の遅れによって引き起こされているかもしれない。そこで、小学五年時の生活実態が中学三年時の学力に及ぼす影響にも着目したい。

これまで、「家庭の生活実態と学力」および「自尊感情と学力」との関連については個別に分析されることが多く、家庭の生活実態と自尊感情の双方を分析に組み込み同和地区児童・生徒の低学力要因に迫る試みはあまりなされてこなかった。この点からも本研究の意義は認められよう。

二 調査の対象と方法

我々の調査グループは、P県P市の同和地区を含む公

立小中学校の児童・生徒に対し二回の調査を実施した。第一回調査（一九九五年一月）はP市の中学校区に位置する三つの公立小学校の五・六年生及び公立中学校一・二年生を、第二回調査（一九九八年九月）は公立P中学校の三年生（一九九五年当時小学五年生だった）を対象とした。

このうち、本研究で分析の対象とするのは、同じ中学校区に位置する三つの公立小学校（A、B、C小学校）の五年生二七三名（うち地区児童六三名）のうち、公立P中学校に進学した者一八五名（うち地区生徒四八名）である。ただし、これら一八五名のうち実質的に分析の対象となるのは、地区出身かどうかが明確であり、かつ「学力調査」と「生活実態調査」を受けている者一六〇名（うち地区生徒四三名）である。

調査は、「学力調査」、「生活実態調査」、「学級担任調査」の三つからなる。「学力調査」には、図書文化社の学力テスト（第一回調査では新CRRT、第二回調査では新CRRTⅡ）を使用した。「生活実態調査」では、基本的な生活習慣・家庭生活・学校生活・友人関係・自己概念・進路希望などを尋ねている。「学級担任調査」は、「生活実態調査」では把握できない児童・生徒に関する情報を入手する意図で実施された(1)。

表1 小学5年時（1995年）の学力調査

| | | 人数 | 正答率 | 標準偏差 |
|----|-----|-----|------|-------|
| 国語 | 全体 | 180 | 68.0 | 17.16 |
| | 地区 | 43 | 67.6 | 17.59 |
| | 地区外 | 117 | 68.2 | 17.07 |
| 算数 | 全体 | 156 | 57.4 | 23.45 |
| | 地区 | 40 | 56.6 | 23.11 |
| | 地区外 | 116 | 57.7 | 23.65 |

※ 統計的検定の結果、*は5%水準で、**は1%水準で、***は0.1%水準でそれぞれ有意であることを示す。以下、同様。

表2 中学3年時（1998年）の学力調査

| | | 人数 | 正答率 | 標準偏差 |
|----|-----|-----|------|----------|
| 国語 | 全体 | 180 | 56.6 | 14.77*** |
| | 地区 | 43 | 48.9 | 17.70 |
| | 地区外 | 117 | 59.4 | 12.48 |
| 数学 | 全体 | 156 | 64.3 | 21.77 |
| | 地区 | 40 | 58.4 | 25.52 |
| | 地区外 | 116 | 66.4 | 20.03 |

調査対象者の小学5年時および中学3年時の「学力調査」の結果を見てみよう（表1、表2）。小学5年時では地区・地区外間で正答率に有意な差は認められないのに対し、中学3年時では国語において有意な差が認められる（ $p < 0.001$ ）。一九九五年調査と一九九八年調査は同一の子どもたちを対象としているため、小学5年時には見られなかった地区・地区外間の学力格差が中学3年時になって顕在化していると言える(2)。

なお、調査を中学3年時の九月に実施したことから学習のテスト問題を削除した数学については、以下の分析に用いない。

中学3年時に
なつて地区・地区外間で学力格差が顕在化していることは、学力偏差値の分布（図1、図2）を見ても明らかである。中学3年時の学力偏差値の分布を見ると、

また、中学三年時の学力偏差値から小学五年時の学力偏差値を減じた学力偏差値の差(表3)を見てみると、地区外では偏差値が平均して一・八ポイント上昇しているのに対し、地区では五ポイント下降している。地区・地区外間の学力格差の顕在化は、地区の子どもたちの学力低下によって引き起こされていると言える。

図1 小学5年時・学力偏差値(国語)の分布

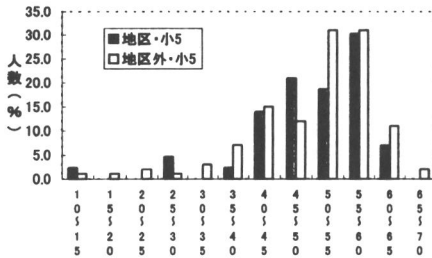
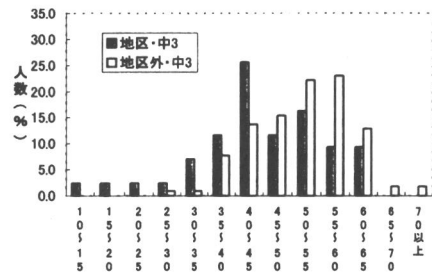


図2 中学3年時・学力偏差値(国語)の分布



地区外では全体的に右の方に偏っている(学力偏差値が高い傾向にある)のに対し、地区では全体的に左の方に偏っている(学力偏差値が低い傾向にある)ことがわかるだろう。

表3 学力偏差値(国語)の差

| | 人数 | 平均値 | 標準偏差 |
|--------------------------|-----|------|----------|
| 学力偏差値の差 (中3偏差値-小5偏差値) | 43 | -5.0 | 13.19*** |
| 地区 | | | |
| 地区外 | 117 | 1.8 | 8.17 |

三 分析の枠組み

学力調査の結果から、小学五年時には見られなかった地区・地区外間の学力格差が中学三年時になって顕在化することが明らかとなった。それでは、学年の進行にともない同和地区の子どもたちの学力が低下するのはなぜなのだろうか(3)。

これまで実施されてきた同和地区を含む小中学校での調査によれば、家庭の生活実態によって学力差が生じているという報告が多く見られる。その場合、家庭の生活実態として特に取り上げられるのは、子どもの自分専用の持ち物や家での生活時間である。高田・葛上(一九九四)は、地区の子どもたちには地区外の子どもたちと比べ、テレビ視聴時間が長く、テレビなどの娯楽的所有物を買ひ与えられる傾向のあることを取り上げ、地区では親による子どもの「生活の構造化」が弱い、としている。「生活の構造化」とは、「直接保護者が子どもの生活をコントロールすることによって、すなわち、生活習慣や学習習慣などの定着化をはかることによって、学力を身に

つけさせていく」(高田・葛上一九九四、三一頁) ことである。同様の指摘は鍋島(一九九四)もしている。鍋島は、地区の子どもたちと地区外の子どもたちで自分専用の持ち物や生活時間を比べた結果から、「部落の保護者の多くは、子どもが学校で成功するように、ひいては社会的上昇移動を果たすように、家庭環境をコントロールし、子どもを家庭学習へと向かわせようとすることに、それほど大きな価値をおいていないことが伺われる」(鍋島一九九四、七六頁)としている。

そこで、本研究では「親による子どもの生活のコントロール」をあらわす指標として、自分専用の持ち物や生活時間を取り上げ、これらが同和地区児童・生徒の学力低下に及ぼす影響を検討する。

また、同和地区児童・生徒の学力低下の要因として、家庭の生活実態のほかに自尊心(4)も取り上げる。先行研究により、自尊心と学力との間に関連の見られることが確認されているが、自尊心が学力の維持ないしは向上につながるのかどうかまでは検討されていない。

以上を踏まえ、具体的には次のような手順にしたがって分析を行う。

(1)「生活時間」と「自分専用の持ち物」の地区・地区外間比較

(2)「生活時間」および「自分専用の持ち物」と(小学五年時から中学三年時にかけての)学力の変化との関連
 (3)自尊心の地区・地区外間比較
 (4)自尊心と(小学五年時から中学三年時にかけての)学力の変化との関連
 (5)以上の結果を踏まえた上で、同和地区児童・生徒の学力低下の規定要因に関する分析を行う。

四 分析結果

(1)家庭の生活実態と学力

①家庭の生活実態の地区・地区外間比較

まずは、生活保護を受けている家庭の者および単親家庭(父親、母親のどちらか一方がいないか、もしくは両親ともいない家庭)の者の割合を地区・地区外間で比較してみたい(表4)。

小学五年時、中学三年時ともに、地区では地区外に比べ要保護家庭出身者の割合が高い(小学五年時 $\cdot p < 0.001$ 、中学三年時 $\cdot p < 0.01$)。生活保護を受けている家庭かどうかは、家庭の経済状

表4 要保護・単親家庭出身者の割合

| | 地区 | 地区外 | |
|-------------|-----------|-----------|-----|
| 小学5年時・要保護家庭 | 25.6 (11) | 6.0 (7) | *** |
| 中学3年時・要保護家庭 | 18.6 (8) | 5.1 (6) | ** |
| 小学5年時・単親家庭 | 16.3 (7) | 12.8 (15) | |
| 中学3年時・単親家庭 | 20.9 (9) | 13.7 (16) | |

※ () 外の数値は%、() 内の数値は人数。以下、同様。

況をあらわす重要な指標と考えられる。地区では地区外に比べ、経済的に苦しい家庭が多いと推察される。

次に、「家での生活時間」と「自分専用の持ち物」を地区・地区外間で比較してみよう。

表5は生活時間の比較である。小学五年時、中学三年時、いずれの時点でも「勉強時間」で有意な差が見られる（小学五年時・中学三年時： $p < 0.05$ ）。地区では地区外に比べ、勉強時間の短い傾向がある。

表6は、「自分専用の持ち物」の比較である。学習用具については、小学五年時の「勉強机」と中学三年時の「学校で決められた以外の参考書や問題集」で、地区よりも地区外で「もっている」と回答した者の割合が高い（小五年時・勉強

表5 家での生活時間

| | | 人数 | 平均値 | 標準偏差 |
|------------------|-----|-----|-----|-------|
| 小学5年時・家での勉強時間 | 地区 | 43 | 3.3 | 1.18* |
| | 地区外 | 117 | 3.8 | 1.48 |
| 中学3年時・家での勉強時間 | 地区 | 42 | 3.0 | 1.51* |
| | 地区外 | 117 | 3.6 | 1.55 |
| 小学5年時・テレビ視聴時間 | 地区 | 43 | 5.8 | 1.21 |
| | 地区外 | 116 | 5.6 | 1.23 |
| 中学3年時・テレビ視聴時間 | 地区 | 42 | 6.4 | 1.12 |
| | 地区外 | 116 | 6.0 | 1.11 |
| 小学5年時・TVゲームをする時間 | 地区 | 43 | 3.5 | 2.25 |
| | 地区外 | 117 | 3.4 | 1.96 |
| 中学3年時・TVゲームをする時間 | 地区 | 42 | 2.7 | 1.99 |
| | 地区外 | 117 | 2.8 | 1.90 |

※ 生活時間については、「ほとんどしない(1点)」から「3時間より多い(7点)」の7段階で回答を求めている。

机・ $p < 0.05$ 、中学三年時・参考書や問題集・ $p < 0.01$)。なお、小学五年時の「学校で決められた以外の参考書や問題集」では有意な差は見られないものの、地区よりも地区外で「もっている」と回答した者の割合が高いことが注目される。

一方、娯楽的所有物について見ると、小学五年時の「テレビ」で、地区外よりも地区で「もっている」と回答した者の割合が高い。

これらの結果から、地区では地区外に比べ、「親による子どもたちの生活のコントロール」が弱い可能性を指摘できる。

②家庭の生活実態と学力の変化

これまでの分析から、地区では地区外に比べ、「経済的に苦しい家庭の多いこと(表4)」、「親による子どもたちの生活のコントロールが弱い可能性のあること(表5、表6)」が明らかとなった。地区に見られるこれらの傾向は、学力低下とどう関わっているのであろうか。この点について

表6 自分専用の持ち物

| | | 小学5年時 | | 中学3年時 | |
|--------|---------|-------|-------|-------|--------|
| | | 地区 | 地区外 | 地区 | 地区外 |
| 学習用具 | 勉強机 | 76.9 | 89.9* | 83.7 | 89.7 |
| | 参考書や問題集 | 58.1 | 72.4 | 77.5 | 93.2** |
| 娯楽的所有物 | テレビ | 35.9 | 19.3* | 25.6 | 30.8 |
| | TVゲーム | 41.0 | 38.5 | 46.5 | 39.3 |

※ 数値は「もっている」と回答した者の割合。

て検討するために、家庭の生活実態と（小学五年時から中学三年時にかけての）学力の変化との関連について分析を試みたい。

学力の変化については、学力偏差値五〇を基準とし、「下位一貫型」「上昇型」「下降型」「上位一貫型」の四類型を設ける。「下位一貫型」とは、小学五年時および中学三年時の学力偏差値がともに五〇未満のグループである。「上昇型」とは、小学五年時の学力偏差値が五〇未満で中学三年時の学力偏差値が五〇以上のグループである。「下降型」とは、小学五年時の学力偏差値が五〇以上で中学三年時の学力偏差値が五〇未満のグループである。「上位一貫型」とは、小学五年時および中学三年時の学力偏差値がともに五〇以上の者である(5)。

表7は、要保護家庭や単親家庭出身かどうかによって学力の変化に違いがみられるのかどうかを検討したものである。中学三年時の要保護家庭出身者は、そうでない家庭の者と比べ、「上位一貫型」の割合が少ない(p<0.01)。同様の傾向は、小学五年時の要保護家庭出身者にも見られる。

次に、生活時間と学力の変化との関連について見てみたい(表8)。なお、生活時間については「短時間層」と「長時間層」の二つにカテゴリー化している。各カテゴリー

表7 要保護・単親家庭と学力の変化

| | | 下位一貫型 | 上昇型 | 下降型 | 上位一貫型 | 合計 |
|-------|------|-------|------|------|-------|-------------|
| 小学5年時 | 要保護 | 44.4 | 11.1 | 27.8 | 16.7 | 100.0 (18) |
| | 非要保護 | 28.9 | 7.0 | 13.4 | 50.7 | 100.0 (142) |
| 中学3年時 | 要保護 | 28.6 | 28.6 | 21.4 | 21.4 | 100.0 (14) |
| | 非要保護 | 30.8 | 5.5 | 14.4 | 49.3 | 100.0 (146) |
| 小学5年時 | 単親 | 50.0 | 9.1 | 9.1 | 31.8 | 100.0 (22) |
| | 非単親 | 27.5 | 7.2 | 15.9 | 49.3 | 100.0 (138) |
| 中学3年時 | 単親 | 28.0 | 8.0 | 20.0 | 44.0 | 100.0 (25) |
| | 非単親 | 31.1 | 7.4 | 14.1 | 47.4 | 100.0 (135) |

表8 生活時間と学力の変化

| | | 下位一貫型 | 上昇型 | 下降型 | 上位一貫型 | 合計 |
|----------------|------|-------|------|------|-------|----------|
| 小5時・勉強時間 | 短時間層 | 47.0 | 12.1 | 9.1 | 31.8 | 100 (86) |
| | 長時間層 | 19.1 | 4.3 | 19.1 | 57.4 | 100 (94) |
| 中3時・勉強時間 | 短時間層 | 37.7 | 8.7 | 15.9 | 37.7 | 100 (89) |
| | 長時間層 | 25.6 | 6.7 | 13.3 | 54.4 | 100 (90) |
| 小5時・テレビ視聴時間 | 短時間層 | 30.3 | 2.6 | 14.5 | 52.6 | 100 (76) |
| | 長時間層 | 31.3 | 12.0 | 15.7 | 41.0 | 100 (83) |
| 中3時・テレビ視聴時間 | 短時間層 | 21.1 | 6.6 | 10.5 | 61.8 | 100 (76) |
| | 長時間層 | 40.2 | 7.3 | 18.3 | 34.1 | 100 (82) |
| 小5時・TVゲームをする時間 | 短時間層 | 20.0 | 6.7 | 22.7 | 50.7 | 100 (75) |
| | 長時間層 | 40.0 | 8.2 | 8.2 | 43.5 | 100 (85) |
| 中3時・TVゲームをする時間 | 短時間層 | 23.8 | 7.5 | 20.0 | 48.8 | 100 (80) |
| | 長時間層 | 38.0 | 7.6 | 8.9 | 45.6 | 100 (79) |

の人数は、ほぼ等しくなるように調整している。小学五年時の「勉強時間」(p<0.001)と「TVゲームをする時間」(p<0.01)、中学三年時の「テレビ視聴時間」(p<0.01)で有意な差が認められる。

る。勉強時間については、時間の短い者は長い者に比べ、「下位一貫型」が多く「上位一貫型」が少ない。一方、「テレビ視聴時間」や「TVゲームをする時間」といった娯楽的時間については、時間の短い者は長い者に比べ、

「下位一貫型」が少なく「上位一貫型」が多い。表9は、自分専用の所有物と学力の変化との関連である。小学五年時の「勉強机」(p<0.01)と「学校で決められた以外の参考書や問題集」(p<0.05)および「TVゲーム」(p<0.05)で有意な差が見られる。また、中学三年時の「学校で決められた以外の参考書や問題集」でも有意な差が認められる(p<0.001)。学習用具については、「もっている」者は「もっていない」者に比べ、「下位一貫型」が少なく「上位一貫型」が多い。一方、娯乐的所有物については、「もっている」者は「もっていない」者に比べ、「下位一貫型」が多く「上位一貫型」

表9 自分専用の持ち物と学力の変化

| | | 下位一貫型 | 上昇型 | 下降型 | 上位一貫型 | 合計 |
|--------|-------------|---------------------------|-------------|--------------|---------------|-----------------------------|
| 学習用具 | 小5時・勉強机 | もっている 25.8 もっていない 65.0 | 8.6 5.0 | 15.6 20.0 | 50.0 100.0 | 100.0 (128)** 20.0 (20) |
| | 中3時・勉強机 | もっている 31.9 もっていない 21.1 | 6.4 15.8 | 13.5 26.3 | 48.2 36.8 | 100.0 (141) 100.0 (19) |
| | 小5時・参考書や問題集 | もっている 23.9 もっていない 44.0 | 8.3 6.0 | 12.8 20.0 | 55.0 30.0 | 100.0 (109)* 100.0 (50) |
| | 中3時・参考書や問題集 | もっている 30.7 もっていない 29.4 | 7.9 5.9 | 10.0 47.1 | 51.4 17.6 | 100.0 (140)** 100.0 (17) |
| | 小5時・テレビ | もっている 42.9 もっていない 27.4 | 5.7 8.8 | 20.0 15.0 | 31.4 48.7 | 100.0 (35) 100.0 (113) |
| | 中3時・テレビ | もっている 31.9 もっていない 30.1 | 10.6 6.2 | 17.0 14.2 | 40.4 49.6 | 100.0 (47) 100.0 (113) |
| 娯乐的所有物 | 小5時・TVゲーム | もっている 48.6 もっていない 21.1 | 6.9 8.9 | 13.8 17.8 | 32.8 52.2 | 100.0 (58)* 100.0 (90) |
| | 中3時・TVゲーム | もっている 39.4 もっていない 24.5 | 9.1 8.4 | 10.5 18.1 | 40.9 51.1 | 100.0 (66) 100.0 (94) |

が少ない。

これらの結果は、子どもの生活時間や持ち物を親がコントロールすることによって、すなわち、子どもにパランスのとれた生活時間を送らせるとともに学習環境を整備することによって、子どもの学力の維持・向上がはかれる可能性を示唆している。

(2) 自尊感情と学力

① 自尊感情尺度項目の因子分析結果

自尊感情尺度項目は全部で二一項目である。これらについて因子分析を適用した(6)。方法としては、因子数を五とし、主因子法により因子を抽出し、バリマックス法による因子軸の回転を行った。表10は小学五年時、表11は中学三年時の結果である。

各因子で負荷の高かった項目(因子負荷量の絶対値が〇・三以上)を小学五年時と中学三年時とで見比べてみると、小学五年時の因子と中学三年時の因子との間に対応関係のある(因子間で共通項目が見られる)ことがわかる(7)。そこで、共通項目の合計得点(8)を小学五年時と中学三年時、それぞれについて算出し、それを「自尊感情尺度」とすることにした。これにより、小学五年時から中学三年時にかけての自尊感情の変化を見ることがで

表10 小学5年時・自尊感情尺度項目因子分析結果

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 | 因子5 |
|--------------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| むずかしいことにつづかったときこそ、がんばるほうだ | 0.618 | -0.116 | 0.172 | 0.121 | 0.065 |
| 学校の勉強には自信をもっている | 0.586 | -0.116 | 0.358 | 0.058 | -0.177 |
| やると決めたことは最後までやり通す | 0.492 | -0.198 | 0.236 | 0.082 | -0.025 |
| わからないことがあれば、わかるまで自分で調べる | 0.463 | -0.032 | 0.186 | 0.239 | -0.164 |
| 先生は私の気持ちをわかってくれている | 0.348 | 0.033 | 0.080 | 0.203 | -0.274 |
| 学校でいやな思いをしたり、元気がなくなることがある | -0.056 | 0.659 | 0.007 | -0.050 | 0.165 |
| ときどき自分はちがう人間になりたいと思うことがある | -0.028 | 0.540 | 0.007 | 0.030 | 0.448 |
| 自分のことをはずかしいと思うことがある | 0.081 | 0.463 | -0.125 | -0.055 | 0.096 |
| 人たちがうごとをするとき、まわりからなんと言われるか気になる | -0.197 | 0.456 | 0.052 | 0.049 | -0.011 |
| よく他の子にいじめられる | -0.058 | 0.451 | -0.122 | -0.036 | -0.003 |
| 私はたよりない人間だ | -0.295 | 0.374 | 0.049 | -0.085 | 0.055 |
| みんなの前ではっきりと自分の意見が言える | 0.397 | 0.088 | 0.671 | -0.158 | -0.135 |
| 人の意見をまとめたり、リーダーになったりする方だ | 0.407 | 0.040 | 0.534 | -0.015 | 0.038 |
| 私はまわりにいる人を楽しくさせることが上手だ | 0.096 | -0.139 | 0.515 | 0.078 | 0.204 |
| 親は私に大きな期待をかけている | 0.054 | 0.001 | 0.469 | 0.222 | -0.082 |
| ともだちは多いほうだ | 0.158 | -0.304 | 0.406 | 0.225 | 0.072 |
| 親は私の気持ちをわかってくれている | 0.227 | -0.031 | -0.028 | 0.710 | -0.049 |
| 私はとてもしあわせだ | 0.071 | -0.258 | 0.371 | 0.475 | 0.024 |
| 家の中で私のことを心配してくれる人は誰もいない | -0.096 | -0.027 | -0.176 | -0.430 | 0.287 |
| 家出をしたいと思ったことが何度もある | -0.076 | 0.357 | 0.043 | -0.158 | 0.711 |
| ほしいものがあれば、がまんできないほうだ | -0.195 | 0.073 | 0.072 | -0.036 | 0.216 |
| 固有値 | 1.911 | 1.883 | 1.851 | 1.213 | 1.092 |
| 寄与率 | 9.1 | 9.0 | 8.8 | 5.8 | 5.2 |

※ 因子負荷量は、絶対値が0.3以上のものを採用した。

表11 中学3年時・自尊感情尺度項目因子分析結果

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 | 因子5 |
|--------------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 学校でいやな思いをしたり、元気がなくなることがある | 0.810 | -0.016 | 0.099 | 0.061 | 0.065 |
| 自分のことをはずかしいと思うことがある | 0.614 | -0.009 | -0.089 | 0.053 | 0.072 |
| ときどき自分はちがう人間になりたいと思うことがある | 0.535 | -0.098 | 0.071 | -0.111 | 0.029 |
| 人たちがうごとをするとき、まわりからなんと言われるか気になる | 0.507 | 0.091 | -0.136 | -0.037 | 0.015 |
| 私はたよりない人間だ | 0.316 | -0.132 | -0.183 | -0.037 | 0.107 |
| 親は私の気持ちをわかってくれている | -0.077 | 0.700 | 0.076 | 0.102 | -0.040 |
| 家の中で私のことを心配してくれる人は誰もいない | 0.018 | -0.594 | -0.088 | 0.068 | 0.136 |
| ともだちは多いほうだ | -0.173 | 0.527 | 0.376 | 0.051 | 0.328 |
| 私はとてもしあわせだ | -0.250 | 0.363 | 0.136 | 0.204 | -0.011 |
| 先生は私の気持ちをわかってくれている | 0.041 | 0.322 | -0.093 | 0.004 | 0.077 |
| 人の意見をまとめたり、リーダーになったりする方だ | 0.022 | -0.034 | 0.718 | 0.095 | -0.135 |
| みんなの前ではっきりと自分の意見が言える | -0.150 | -0.008 | 0.569 | 0.155 | 0.072 |
| 私はまわりにいる人を楽しくさせることが上手だ | -0.037 | 0.140 | 0.537 | 0.128 | 0.198 |
| やると決めたことは最後までやり通す | 0.033 | 0.039 | 0.042 | 0.675 | 0.159 |
| わからないことがあれば、わかるまで自分で調べる | -0.031 | -0.050 | 0.093 | 0.534 | -0.125 |
| むずかしいことにつづかったときこそ、がんばるほうだ | -0.094 | 0.014 | 0.234 | 0.533 | 0.025 |
| 学校の勉強には自信をもっている | -0.021 | 0.115 | 0.155 | 0.483 | -0.180 |
| 家出をしたいと思ったことが何度もある | 0.143 | -0.305 | 0.063 | -0.082 | 0.455 |
| ほしいものがあれば、がまんできないほうだ | 0.066 | 0.082 | 0.023 | -0.013 | 0.413 |
| よく他の子にいじめられる | 0.213 | -0.143 | -0.112 | 0.163 | -0.119 |
| 親は私に大きな期待をかけている | 0.054 | 0.156 | -0.100 | 0.193 | 0.031 |
| 固有値 | 1.885 | 1.574 | 1.500 | 1.460 | 0.685 |
| 寄与率 | 9.0 | 7.5 | 7.1 | 7.0 | 3.3 |

きる。

小学五年時の第一因子と中学三年時の第四因子では、「むずかしいことにおつかつたときこそ、がんばるほうだ」「学校の勉強には自信をもっている」「やると決めたことは最後までやり通す」「わからないことがあれば、わかるまで自分で調べる」という四項目が共通しており、これらの合計得点を「最後まで努力してがんばる」という意味で「勤勉性」と命名した。

小学五年時の第二因子と中学三年時の第一因子では、「学校でいやな思いをしたり、元気がなくなることがある」「ときどき自分はずがう人間になりたいと思うことがある」「自分のことをはづかしいと思うことがある」「人たちがうことをするとき、まわりからなんと言われるか気になる」「私はたよりない人間だ」という五項目が共通しており、これらの合計得点を「今の自分をありのままに受け入れることができない」という意味で「自己不信」と命名した。

小学五年時の第三因子と中学三年時の第三因子では、「みんなの前ではつきりと自分の意見が言える」「人の意見をまとめたり、リーダーになったりする方だ」「私はまわりにいる人を楽しくさせることが上手だ」という三項目が共通しており、これらの合計得点を「自己を表現す

ることに自信を持っている」という意味で「自己表現」と命名した。

小学五年時の第四因子と中学三年時の第二因子では、「親は私の気持ちをわかってくれている」「私はとてもしあわせだ」「家の中で私のことを心配してくれる人は誰もいない（因子負荷量マイナス）」という三項目が共通しており、「家の人に受け入れられており幸せを感じている」という意味で「家の人による受容」と命名した。

②自尊感情の地区・地区外間比較

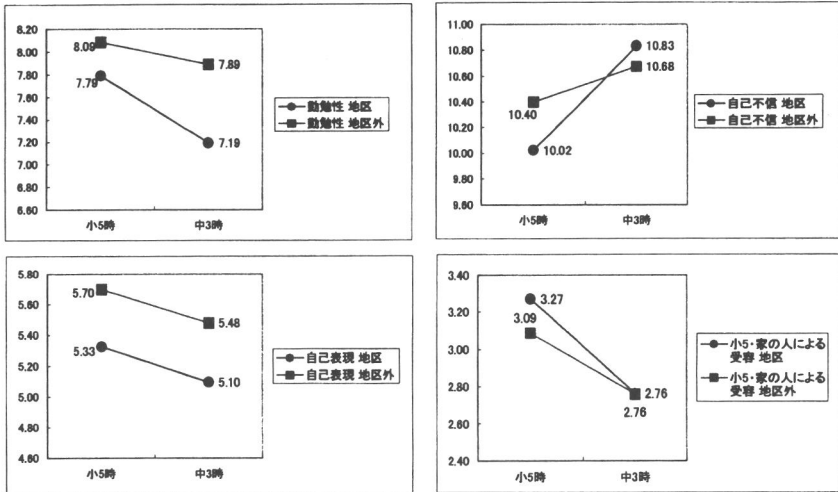
区外間比較

表12は、先の四つの自尊感情、すなわち「勤勉性」「自己不信」「自己表現」「家の人による受容」を地区・地区外間で比較したものである。また、図3は、小学五年時から中学三年時にかけての自尊感情の変化を視覚的に読み取れるよう、表12の

表12 自尊感情（合計得点）の地区・地区外間比較

| | | 人数 | 平均値 | 標準偏差 |
|-------------|-----|-----|-------|------|
| 小5・勤勉性 | 地区 | 43 | 7.79 | 1.75 |
| | 地区外 | 116 | 8.09 | 2.06 |
| 中3・勤勉性 | 地区 | 42 | 7.19 | 1.70 |
| | 地区外 | 117 | 7.89 | 1.76 |
| 小5・自己不信 | 地区 | 42 | 10.02 | 2.27 |
| | 地区外 | 115 | 10.40 | 2.52 |
| 中3・自己不信 | 地区 | 42 | 10.83 | 2.95 |
| | 地区外 | 117 | 10.68 | 2.43 |
| 小5・自己表現 | 地区 | 43 | 5.33 | 1.36 |
| | 地区外 | 116 | 5.70 | 1.78 |
| 中3・自己表現 | 地区 | 42 | 5.10 | 1.65 |
| | 地区外 | 117 | 5.48 | 1.43 |
| 小5・家の人による受容 | 地区 | 41 | 3.27 | 1.43 |
| | 地区外 | 116 | 3.09 | 1.52 |
| 中3・家の人による受容 | 地区 | 42 | 2.76 | 1.21 |
| | 地区外 | 116 | 2.76 | 1.41 |

図3 自尊感情の変化



結果をグラフ化したものである。「勤勉性」と「自己表現」については、小学五年時に見られた地区・地区外間の若干の開きが、中学三年時でも維持されていることがうかがえる。「勤勉性」にいたっては、中学三年時で有意な差が見られる ($P < 0.05$) ことから、地区・地区外間で差が拡大していると思われることもできよう。ただし、地区・地区外間で自尊感情に際立った差は見られない。

表13 自尊感情と学力の変化

| | | 下位一貫型 | 上昇型 | 下降型 | 上位一貫型 | 合計 |
|-------------|---|-------|------|------|-------|----------------|
| 小5・勤勉性 | 低 | 43.8 | 9.4 | 9.4 | 37.5 | 100.0 (64) * |
| | 高 | 22.1 | 6.3 | 18.9 | 52.6 | 100.0 (95) * |
| 中3・勤勉性 | 低 | 36.6 | 9.9 | 18.3 | 35.2 | 100.0 (71) |
| | 高 | 26.1 | 5.7 | 11.4 | 56.8 | 100.0 (88) |
| 小5・自己不信 | 低 | 29.5 | 6.4 | 16.7 | 47.4 | 100.0 (78) |
| | 高 | 31.6 | 8.9 | 13.9 | 45.6 | 100.0 (79) |
| 中3・自己不信 | 低 | 34.2 | 6.6 | 13.2 | 46.1 | 100.0 (76) |
| | 高 | 27.7 | 8.4 | 15.7 | 48.2 | 100.0 (83) |
| 小5・自己表現 | 低 | 42.3 | 10.3 | 19.2 | 28.2 | 100.0 (78) *** |
| | 高 | 19.8 | 3.7 | 11.1 | 65.4 | 100.0 (81) |
| 中3・自己表現 | 低 | 39.2 | 5.1 | 13.9 | 41.8 | 100.0 (79) |
| | 高 | 22.5 | 10.0 | 15.0 | 52.5 | 100.0 (80) |
| 小5・家の人による受容 | 低 | 33.3 | 5.7 | 11.5 | 49.4 | 100.0 (87) |
| | 高 | 25.7 | 10.0 | 18.6 | 45.7 | 100.0 (70) |
| 中3・家の人による受容 | 低 | 34.8 | 4.3 | 14.5 | 46.4 | 100.0 (69) |
| | 高 | 28.1 | 10.1 | 14.6 | 47.2 | 100.0 (89) |

小学五年時に、中学三年時で

の) 学力の変化との関連を見たものである。なお、自尊感情については、「低(得点層)」と「高(得点層)」の二つにカテゴリー化している。各カテゴリーの人数は、ほぼ等しくなるように調整している。

小学五年時の「勤勉性」(P<0.05)と「自己表現」(P<0.001)で有意な差が見られる。いずれにおいても、自尊感情の高い者は低い者に比べ、「下位一貫型」が少なく「上位一貫型」が多い。この結果は、自尊感情が学力の維持ないしは向上につながる可能性を示唆している。

(3) 学力低下の規定要因に関する分析

これまで、「家庭の生活実態と学力」および「自尊感情と学力」との関連を個別に分析してきた。ここでは、これまでの分析結果を踏まえ、家庭の生活実態と自尊感情とを同時に組み込んだ分析を行い、同和地区児童・生徒の学力低下の要因について検討を試みたい。

まずは、これまでの分析結果を要約してみよう。

- ① 地区では地区外に比べ、生活保護を受けている家庭の者が多い(表4)。
- ② 地区では地区外に比べ、勉強時間の短い傾向が見られる(表5)。
- ③ 地区では地区外に比べ、学習環境が整備されていない

い傾向が見られる(表6)。この傾向は、小学五年時で顕著である。

- ④ 生活保護を受けている家庭出身であるかどうかということと学力の変化とは関連している(表7)。
- ⑤ 生活時間と学力の変化とは関連している(表8)。
- ⑥ 自分専用の持ち物と学力の変化とは関連している(表9)。
- ⑦ 自尊感情については、地区・地区外間で際立った差は見られない(表12、図3)。
- ⑧ 自尊感情のうち、

小学五年時の「勤勉性」と「自己表現」が学力の変化と関連している。ただし、中学三年時の自尊感情と学

表14 分析に使用する変数

| | | |
|------|------------|---|
| 従属変数 | 学力の低下 | 小学5年時の学力層差値から中学3年時の学力層差値を減じたもの。 |
| 独立変数 | 性別 | 男子であれば1、女子であれば0のダミー変数。 |
| | 同和地区 | 地区出身であれば1、それ以外であれば0のダミー変数。 |
| | 要保護 | 小学5年時、中学3年時それぞれについて、生活保護を受けている家庭出身であれば1、そうでなければ0の得点を配分し、双方の合計得点を用いている。小学5年時、中学3年時ともに生活保護を受けていれば、得点は2点となる。 |
| | 生活時間の乱れ(9) | 「家での勉強時間」「テレビ視聴時間」「TVゲームをする時間」それぞれについて、1点(ほとんどしない)から7点(3時間より多い)の得点を配分し、これら3つの観測変数を主成分分析で合成した変数を用いている。 |
| | 学習用具 | 自分専用の「勉強机」と「学校で決められた以外の参考書や問題集」それぞれについて、所有していれば1、所有していなければ0の得点を配分し、双方の合計得点を用いている。 |
| | 網楽的所有物 | 自分専用の「テレビ」と「TVゲーム」それぞれについて、所有していれば1、所有していなければ0の得点を配分し、双方の合計得点を用いている。 |
| | 小学5年時の学力 | 小学5年時の学力層差値を用いている。 |
| | 自尊感情 | 学力の変化との関連が見られた、小学5年時の「勤勉性」と「自己表現」を用いている。 |

力の変化との間には関連が見られない(表13)。

以上の結果を踏まえ、以下では学力低下の規定要因に関する分析(重回帰分析)を行いたい。分析に使用する変数は、表14の通りである。なお、独立変数には統制変数として「小学五年時の学力」を採用する。これにより、小学五年時の学力が同等の者同士を比べた場合、なにが学力低下の引き金となっているのかを明らかにすることができる。

表15は、学力低下の規定要因に関する重回帰分析を行った結果である。学力低下に有意な影響を及ぼしているのは、「同和地区」($p > 0.05$)、「小学五年時の学習用具」($p > 0.01$)、「小学五年時の娯楽的所有物」($p > 0.05$)、「小学五年時の学力」($p > 0.001$)、「小学五年時の自己表現」($p > 0.05$)

表15 学力低下の規定要因に関する分析

| | B | β |
|--------------------|--------|----------|
| 同和地区 | 3.201 | 0.156* |
| 性別 | 2.404 | 0.134 |
| 養保護 | 0.392 | 0.022 |
| 小学5年時・学習用具 | -3.099 | -0.207** |
| 小学5年時・娯楽的所有物 | 1.742 | 0.146* |
| 小学5年時・バランスの悪い生活時間 | 0.383 | 0.041 |
| 小学5年時の学力 | 0.811 | 0.631*** |
| 中学3年時・学習用具 | -2.190 | -0.121 |
| 中学3年時・娯楽的所有物 | -0.835 | -0.072 |
| 中学3年時・バランスの悪い生活時間 | 0.160 | 0.018 |
| 小学5年時・勤勉性 | 0.699 | 0.153 |
| 小学5年時・自己表現 | -0.944 | -0.174* |
| R ² | 0.463 | |
| 調整済みR ² | 0.413 | *** |

という五つの変数である。「同和地区」を除き、いずれも小学五年時の変数であることが注目される。「同和地区」は正の影響を及ぼしていることから、「同和地区出身であること」そのこと自体が学力の低下を引き起こしていると言える。

「小学五年時の学習用具」は負の影響を、また、「小学五年時の娯楽的所有物」は正の影響をそれぞれ及ぼしていることから、早期に学習環境を整備すること(学習用具の整備と娯楽的所有物の制限)が学力の低下を防ぐことがわかる。この結果と先の分析結果、すなわち、「地区では地区外に比べ、学習環境が整備されていないこと(表6)」とを考え合わせると、同和地区児童・生徒の学力低下は、早期に学習環境が整備されていないことに大きく起因していると考えられる。

また、「小学五年時の自己表現」は負の影響を及ぼしていることから、小学五年時に「自己を表現することに自信をもっている」ことが学力の低下を防ぐこともうかがえる。

五 全体的考察

本研究により、同和地区児童・生徒の学力低下は、次の二つによって引き起こされていることが明らかとなっ

た。一つは、「同和地区出身であること」そのものである。もう一つは、「早期に学習環境が整備されていないこと」である。以下、それぞれについて若干の考察を行いたい。

同和地区出身であることが学力低下に直接影響を及ぼしていた。この点については、本研究で用いたデータに階層の変数が含まれていないことを考慮すべきかもしれない。中学三年時は小学五年時に比べ、学習内容の難易度が増すため、中学三年時の学力は小学五年時の学力以上に階層的要因の影響を強く受ける可能性がある。同和地区出身であることと中学三年時の学力との間を取り結ぶものとして、階層的要因が存在すると考えられるのである。今後は、階層的要因を含めた分析を行い、あらためてこの問題を問う必要がある。

また、本研究により、地区では早期に学習環境が整備されていない傾向が見られ、そのことが地区の子どもの学力低下を引き起こしていることが明らかとなった。

学習用具を整備しない一方でテレビに代表される娯楽的所有物を買う与えることが、子どもの家庭学習を妨げ、学力低下を引き起こすことは自明のことのように思われる。この点を鑑みれば、地区の保護者は、子どもの学力を維持・向上させることに無関心のように思われるかもしれない。しかし、地区の保護者は、学力に代表される

ような学校的価値を軽んじているわけではない(10)。表16を見ていただきたい。これから、地区と地区外では「家の人(主には保護者)の子どもの勉強面に対する養育態度」にほとんど違い

の見られないことがわかる。ただし、「家の人の子どもへの進学期待」を地区・地区外間で比較

(表17)すると、中学三年時で有意な差が見られる(p<0.05)。

地区外では高等教育機関への進学を希望する割合が高いのに対し、地区では「高校まで」の割合が最も高く六割近くを占めている。

これらの二つの結果から、地区の保護者は、子どもに学力

表16 家の人の子どもの勉強面に対する養育態度

| | 小学5年時 | | 中学3年時 | |
|------------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | 地区 | 地区外 | 地区 | 地区外 |
| あなたが家で勉強しないときに、きびしくしかる | 55.8 (24) | 51.3 (60) | 52.4 (22) | 53.0 (62) |
| あなたの成績がよいときに、ほめてくれる | 71.4 (30) | 79.3 (92) | 57.1 (24) | 56.9 (66) |

※「あてはまる」と回答した者の割合

表17 家の人の子どもへの進学期待

| | | 高校まで | 大学・短大まで | なにもいわない いわからない | 合計 |
|-------|-----|-------|---------|-------------------|-------------|
| | | 小学5年時 | 地区 | 32.6 | 16.3 |
| | 地区外 | 24.8 | 27.4 | 47.9 | 100.0 (117) |
| 中学3年時 | 地区 | 59.0 | 23.1 | 17.9 | 100.0 (39) |
| | 地区外 | 37.1 | 48.3 | 14.7 | 100.0 (116) |

※「高校まで」のなかには、「すぐ仕事につく」専門学校や各種学校に行くも含まれている。

を身につけさせることを重要と認めつつも、子どもに高い学歴を望んでいるわけではないことがうかがえる。これに対し、地区外の保護者は、子どもが学力を身につけることを通じて高い学歴を獲得できるよう、早期から学習環境を整備するなどして子どもの生活をコントロールしているものと考えられる。地区・地区外間の学力格差顕在化の背景には、保護者が学力を学歴獲得のための手段と見なすかどうかの違いがあると推察されるのである。それでは、地区の保護者が子どもに高学歴を期待しないのはなぜなのだろうか。この点について、「カーストバリアー（鍋島一九九三）」と「高学歴者という身近な役割モデルの不在」という二点から説明を試みたい。

まず、「カーストバリアー」による説明である。鍋島によれば、地区の人々は「身分学校」などの学校教育のカーストバリアーや、就職差別などの学校外のカーストバリアーといった、様々なカーストバリアーにさらされてきた。鍋島は、これらの差別によって、地区の人々のなかに教育や地位移動システムに対する不信感が生み出された可能性を指摘する。このような不信感は、徐々になくなつてはきているものの完全に払拭されてはおらず、それが子どもに対する学歴期待の低さとなって顕現しているものと考えられる。

もう一つは、「高学歴者という身近な役割モデルの不在」による説明である。高学歴者が身近に存在し、彼らが社会的上昇移動を果たしている場合、高学歴の取得を意味するものとして実感することができる。しかし、地区には高学歴者が少ない(1)ため、地区の保護者は学歴の効用を実感しにくい状況にあると推察されるのである。

また、地区で娯楽的所有物を買ひ与えられる傾向が見られる背景的要因として、「消費社会」の影響を無視することはできない。地区の子どもたちにテレビなどの娯楽的所有物が多く与えられる傾向があるという結果は、泉南市で行われた調査（一九九三）からもうかがえる。この点について西田（一九九三）は、地区の親たちは子ども時代に貧しかった経験をもっており、そのことが子どもに物を買ひ与えるという行動になつて現れているのではないかと述べている。さらに、西田は次のように続けている。「差別によって低位にとどめられてきた地区の生活が、同和対策によって改善されてきたのは近年のことである。急激な生活変動の途上に地区は置かれているといえるだろう。持ち物の面で地区の子どもの所有率が高い傾向は、『遅れてきた高度成長』による生活変動のなかでの親たちの混乱を示しているのではないだろうか。」（西田一九九三、三九頁）我々がこのたび調査対象とし

た地区の親たちも、これとよく似た状況に直面していると考えられる。地区の子どもたちは、遅れて参入した消費社会の波をもろに被っているのかもしれない。

なお、地区・地区外間で自尊心にあまり差は見られないものの、自尊心(小学五年時の自己表現)が学力の低下を防ぐことが明らかとなった。この結果は、学校教育の可能性を示唆している。家庭の生活実態が学力と関連が深いからといって、教師が低学力の子どもたちの家庭に直接介入し、子どもたちの学習環境を変えることは現実的に難しい。一方、自尊心については、教師の子どもへの働きかけによって高められる可能性が高い。

ただし、単に自尊心を高めればよいというわけではなく、現実自己とのバランスを考える必要がある⁽¹²⁾。子どもたちが実際の自分とはあまりにもかけ離れた自己像を形成し、自尊心を高めたところで、それは学力には結びつかないだろう。この点について十分に配慮した上で、子どもたちの自尊心を高める教育実践を行っていく必要があるだろう。

〈注〉

(1) 詳しくは、原田(二〇〇三、三四―四二頁)を参照

のこと。

(2) 「学力調査」(新CRTⅡ)の全国平均正答率は次のようになっている。小学五年・国語七五・三、算数六三・四。中学三年・国語六四・五、数学五九・〇。

(3) この点については、まず、階層的要因の重要性が指摘されねばならない。荻谷(一九九七、一三二―一三三頁)は、一九八五年に大阪府下で実施された「被差別部落の子どもたちの学力総合実態調査」を森(一九八六)が分析した結果から数値を再計算し、学力の規定要因についてパス解析を行っている。それによれば、同和地区出身かどうかよりも、親の職業が子どもたちの学力に大きな影響を及ぼしている。この結果に鑑みれば、同和地区児童・生徒の学力低下の背後に階層的要因が潜んでいることは十分に予想される。しかし、我々の調査ではプライバシー等の問題から、親の職業・収入・学歴を把握することができなかった。

(4) 自尊心項目尺度については、大阪大学グループが箕面市調査(一九八八)および泉南市調査(一九九二)で使用した項目を参考にしている。大阪大学グループの項目は、クーパーズミス(Coopersmith, 1967)の尺度をもとにしている。

(5) 表18は、地区・地区外間で学力の変化を比較したも

表18 学力の変化

| | 下位一貫型 | 上昇型 | 下降型 | 上位一貫型 | 合計 |
|-----|-------|-----|------|-------|-------------|
| 地区 | 39.5 | 4.7 | 25.6 | 30.2 | 100.0 (43)* |
| 地区外 | 27.4 | 8.5 | 11.1 | 53.0 | 100.0 (117) |

表19 学力の変化の4類型別・学力偏差値の差
(中学3年—小学5年時)

| | | 人数 | 平均値 | 標準偏差 |
|-------|-----|----|-------|---------|
| 下位一貫型 | 地区 | 17 | -0.7 | 9.52 |
| | 地区外 | 32 | 3.6 | 10.33 |
| 上昇型 | 地区 | 2 | 7.3 | 1.48 |
| | 地区外 | 10 | 13.4 | 7.11 |
| 下降型 | 地区 | 11 | -20.9 | 12.67** |
| | 地区外 | 13 | -7.9 | 3.50 |
| 上位一貫型 | 地区 | 13 | 1.1 | 5.76 |
| | 地区外 | 62 | 1.1 | 4.32 |

(7)

小学五年時の第五因子と中学三年時の第五因子では、負荷の高い項目が共通している。

それぞれの項目について、「あてはまる」と回答した場合には三点、「どちらかわからない」と回答した場合には二点、「あてはまらない」と回答した場合に一点をそれぞれ配分している。

(10)

池田ら(一九九六)は、保護者や教師、子ども会指導員らにインタビュー調査を数年にわたって行った結果、

「生活時間の乱れ」と命名した。

表20 生活時間の主成分分析結果(小学5年時)

| | 生活時間の乱れ |
|----------------|---------|
| 小5時・テレビ視聴時間 | 0.706 |
| 小5時・TVゲームをする時間 | 0.697 |
| 小5時・家での勉強時間 | -0.524 |
| 固有値 | 1.259 |
| 寄与率 | 42.0 |

表21 生活時間の主成分分析結果(中学3年時)

| | 生活時間の乱れ |
|----------------|---------|
| 中3時・テレビ視聴時間 | 0.767 |
| 中3時・家での勉強時間 | -0.673 |
| 中3時・TVゲームをする時間 | 0.580 |
| 固有値 | 1.379 |
| 寄与率 | 46.0 |

(6)

間で学力偏差値の差を比較してみた(表19)。「下降型」で有意な差が見られ(コ<0.00)、地区外よりも地区で学力偏差値の低下の著しいことがうかがえる。

それぞれの項目について、「あてはまる」と回答した場合には三点、「どちら

(9)

生活時間について主成分分析を行った結果が、表21である。小学五年時、中学三年時、いずれにおいても、因子負荷量が「家での勉強時間」でマイナス、「テレビ視聴時間」や「TVゲームをする時間」でプラスとなっている。

(8)

因子負荷量がマイナスの項目については、「あてはまる」に一点、「どちらかわからない」に二点、「あてはまらない」に三点を配分し、合計得点を算出している。

地区では「下位一貫型」や「下降型」が多い一方で、地区外では「上位一貫型」が多いことがわかる。次に、学力の変化の四類型別に、地区・地区外

「あてはまる」と回答した場合には三点、「どちらかわからない」と回答した場合には二点、「あてはまらない」と回答した場合には一点をそれぞれ配分している。

生活時間について主成分分析を行った結果が、表21である。小学五年時、中学三年時、いずれにおいても、因子負荷量が「家での勉強時間」でマイナス、「テレビ視聴時間」や「TVゲームをする時間」でプラスとなっている。

因子負荷量がマイナスの項目については、「あてはまる」に一点、「どちらかわからない」に二点、「あてはまらない」に三点を配分し、合計得点を算出している。

地区では「下位一貫型」や「下降型」が多い一方で、地区外では「上位一貫型」が多いことがわかる。次に、学力の変化の四類型別に、地区・地区外

学力に象徴されるような学校的価値が地区にも浸透し、教育に対する関心や学力を重視する価値観が地区の人々にも広く受容されるようになってきたことを明らかにしている。

(11) 参考までに、一九九三年時点のP市全体の同和関係者（同和対策の対象となる地区出身者）の年齢別学歴構成を見てみよう（表22）。高等教育機関卒業者の割合は、一般的にいつて、決して高くない。

(12) この問題については池田（一九九二）も指摘している。

引用および主要参考文献

- 池田 寛（一九九二）「箕面における実態調査から」『解放教育』第二九一号、明治図書、八一―二〇頁。
- 池田 寛（一九九六）「自己概念と学力に関する理論的考察―部落の学力・生活実態調査の結果から―」『大阪大学人間科学部紀要』第二二巻、四三三―四五五頁。

表22 P市同和関係者（世帯主）の学歴構成（1993年調査）

| | 不就学 | 旧小・新中卒 | 旧中・新高卒 | 短大・大学卒 | 不明 | 合計 |
|--------|-----|--------|--------|--------|-----|-------------|
| 20-34歳 | 0.0 | 12.3 | 60.7 | 26.2 | 0.8 | 100.0 (122) |
| 35-49歳 | 1.2 | 24.4 | 62.5 | 11.9 | 0.0 | 100.0 (168) |
| 50-64歳 | 2.6 | 67.2 | 24.6 | 5.1 | 0.5 | 100.0 (195) |
| 65歳以上 | 8.7 | 73.9 | 13.8 | 2.9 | 0.7 | 100.0 (138) |

池田 寛（二〇〇〇）『学力と自己概念―人権教育・解放教育の新たなパラダイム』解放出版社。

遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋（一九九二）『セルフ・エスティームの心理学―自己価値の探求』ナカニシヤ出版。

荻谷剛彦（一九九七）『教育における不平等とへ差別―不平等問題のダブルスタンダードと「能力主義的差別」』解放教育研究所編『解放教育のアイデンティティ』明治図書、二二八―一四五頁。

荻谷剛彦（二〇〇二）『階層化日本と教育危機―不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂。

学力総合実態調査実行委員会（一九八六）『学力と生活の向上をめざして―一九八五年被差別部落の子どもの学力実態調査報告―』。

泉南市教育委員会（一九九三）『泉南市 学力・生活総合実態調査報告書』。

高田一宏・葛上秀文（一九九四）『教育調査の現場からのレポート―大阪府の実態調査から』『解放教育』第三一〇号、明治図書、二六―三三頁。

高田一宏（一九九六）『同和地区における保護者の教育意識と学力形成―大阪府A市での聞き取り調査から―』『大阪大学人間科学部紀要』第二二巻、四五七―

四七五頁。

田畑元信（一九九二）「大阪の学力実態調査について―
【学力・生活総合研究委員会 調査報告】の紹介―
【部落解放研究】第八二号、部落解放研究所、一一八
―一四三頁。

外川正明（一九九八）「これからの学力保障を考える―
同和教育の「新たな創成」に向けて」【解放教育】第
三六九号、明治図書、三〇―四三頁。

鍋島祥郎（一九九三）「部落」マイノリティと教育達
成―J. U. オグブの人類学的アプローチをてがか
りに―」【教育社会学研究】第五二集、東洋館出版社、
二〇八―二三一頁。

鍋島祥郎（一九九四）「被差別部落コミュニティにおけ
る家庭の養育態度と子どもたちの達成意欲に関する
考察」【部落解放研究】第九八号、部落解放研究所、
六九―八三頁。

西田芳正（一九九三）「子どものライフスタイル」泉南
市教育委員会「泉南市 学力・生活総合実態調査報
告書」、二〇―四〇頁。

原田彰編（二〇〇三）「学力問題へのアプローチ―マイ
ノリティと階層の視点から」多賀出版。

部落解放研究所編（一九九六）「地域の教育改革と学力

保障」解放出版社。

箕面市教育委員会（一九九〇）「箕面市 教育実態調査
報告書」。

森 実（一九八六）「学力総合実態調査と解放教育」
【部落解放研究】第五一号、部落解放研究所、三二―
四五頁。

米川英樹（一九九八）「生活・学習理解度調査から」解
放教育研究所編「解放の学力とエンパワーメント」
明治図書、九七―一一六頁。

Coopersmith, S. 1967, *The antecedents of self-esteem.*

San Francisco : W. H. Freeman.

